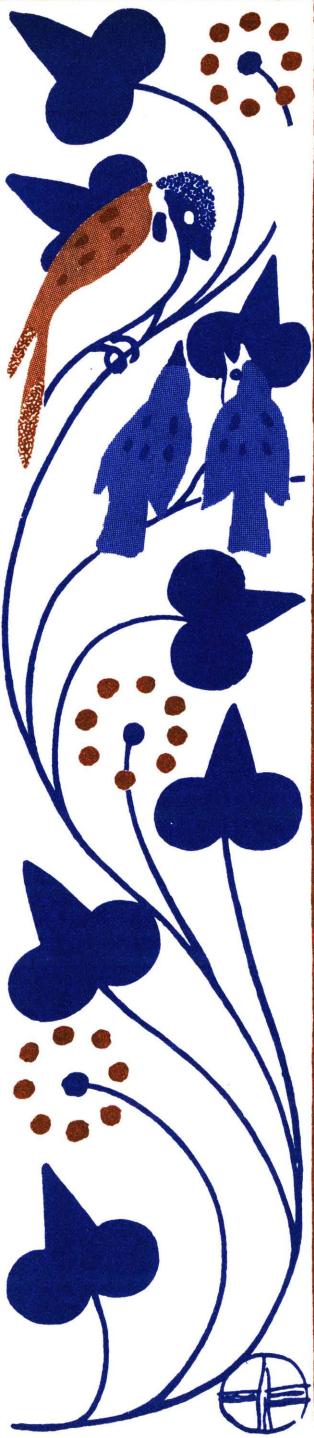


第十四卷  
第十一號

婦人と子ども



大正三年十一月五日

フレーベル會

## 第十四卷第十一號目次

我國及歐米に於ける玩具製造に就て

鶴見左吉雄

子供の戦争ごっこ

岸邊福雄

湖畔詩人に歌はれたる子供

福島政雄

『ボール・ドンキー』

岡田みつ

文展の子供の繪と彫刻

倉橋生

フレーベル自傳（第十一回）

倉橋惣三譯

本誌定價  
一冊郵稅共金拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢

購讀申込

六冊前金郵稅共六拾錢  
郵券代用一割增

本誌宛諸般の御用務は左の如く願ひます  
(庶務上保母紹介に關する件をも含む)の御手紙は  
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事  
務所宛  
會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、  
兩森釧宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々

木山谷一二四倉橋惣三宛  
大正三年十一月四日印刷  
東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印 刷 者 東京市本所區番場町四番地  
印 刷 所 東京市本所區番場町四番地  
編輯兼發行者 倉 橋 惣 三  
登 井 東京市本所區番場町四番地

大正三年十一月五日發行  
東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四  
木山谷一二四倉橋惣三宛  
大正三年十一月四日印刷  
東京市本所區番場町四番地  
印 刷 者 東京市本所區番場町四番地  
印 刷 所 東京市本所區番場町四番地  
出版印刷株式會社本所分工場  
フレーベル會

# 顧問高島平三郎先生

# モドコ

毎月二回  
教面綺 育白麗 的いな  
一本日  
雑誌 畫  
定價  
一圓二十郵冊稅冊  
拾月八稅分五拾  
錢分錢共前厘錢

行發社モドコ 七五町林區川石小市京東  
三六九七二京東替振

# 兒童研究

社會の改善も、人類の向上も、文明の進歩も、國家の發展も、詮じつむれば、ただ善良の兒童を得るにありと言ふことになる。兒童を愛する國は興り、兒童を顧みざる國は亡ぶ、これは千古萬古變ることなき箴言である。兒童の研究は、ひとり教育家や、醫家に一任して置くべきものではない。世の父兄自ら研究すべき筈のものである。兒童の研究は即ち我を愛し、家を愛し、國を愛し、人類を愛することになる、兒童のために最善を謀らざる家庭は、決して幸福を望むことは出來ぬ、我儕は何人も兒童の研究に興味を持たれんことを一切に希望してやまないのである。

○會費半箇年分金九十錢 同一箇年分一圓八十錢 ○兒童研究は毎月一回二十五日發行 ○會員には無代頒布 ○見本金十五錢

東京市本郷區千駄木町五十番地

日本兒童學會

# 我國及歐米に於ける玩具製造に就て

農商務省書記官 鶴見左吉雄

(フレーベル會總會に於ける講演)

私は幼稚園について深い智識もないし、また別に研究して見た事もないのですが、たゞ玩具について少しばかり趣味をもつて居りますので、方々旅行する間にもつひ注意するやうになりますし、また一方農商務省の商品陳列場にも關係して居るものですから、そこへは世界の商品が集つて来る、その中には玩具もありますので、自然氣のついた事を二三申上げて見たいと思ひます。

先き程、隣の教育博物館内の陳列品を一通り參觀しました。これまで幾度か見たのですが、今日はお話をする爲めに今一度見なほしてきたのであります。子供に有益な品物がよほど澤山に陳列せられて居ります。その中には外國品もあり内國品もあります。見てゆく中に、一番さきに氣のついたのは、玩具に各國民性の著しくあらはれて居る點であります。獨逸製のものは、獨逸の國民性があらはれて居るし、英國のは英國民性、米國のは米國民性の氣象がよく見えて居ります。また内國製のものは、日本の現代の國民性をいかにもよく裏かきして居るやうに思はれます。前にもさういふ事を考へないでもなかつたが、今日更に其感を強くしたので御座います。

獨逸製のものは歯車せんまい仕掛けなどの如き自動的玩具、機關機器の模型など凡べて子供が之を動かして、智識を開發し常識を養ふやうに出来て居る。獨逸といふ國は機械工業が世界に冠絶して居て、かつ科學が大進歩を遂げて居るので、商

工業の如きも近年までその第一位を占めて居た英國を凌駕する勢を示して居ります。昨年の貿易額をあげて見ると、英國は百十一億、獨逸は百二億、先輩の佛蘭西は八十億、日本は僅に十三億三千萬圓で、獨逸の十分の一に過ぎません。獨逸は實に各方面に發達して居るのであります。畢竟基礎工業が盛であるから、商工業も、學術も、軍事に關する智識も凡べて大發展をなしたので御座います。

日本製の玩具を見ると、綿製の小犬、ちゃんこ、兎などが多い、そしてそれは多く外國製のものをまねた模造品であります。ブリキ製のものもあるが、之もうすつべらで、どつしりして居ない、規模が小さいのです。

しかし、日本の玩具に悉くけちをつけたくない。

古來用ひ來つた三月五月の節句人形の如きながら立派なものがあります。武者人形は、その甲冑裝束をなして、子供に智識を與へ、かつ大英雄の

像を彷彿せしめて、其の感化を蒙らしむる事も出来る。雛人形は之に家具の一切を取りそろへて、女兒に必要な智識を與へようとして居ります。

玩具の製作を見て、其國の文明の程度及び國民の性質を知るは容易であります。日本人は手さきが器用で、かつその性質がよほど樂天的で、玩具製造に適して居るから、今後各方面から之を研究して改良進歩をはかる時は、前途有望なるものがあらうと思はれます。

現今獨逸は最もよき玩具製作國としてしられて居ります。一年の製產高は五千萬圓であつて、その中米國に輸出するもの千五百萬圓であります。日本から米國に輸出するのは一年に二百五十萬圓位のもので製產高は精細ではないが、まあ五六百萬圓位のものです。

獨逸の玩具工業は、家内工業であります。日本と同様に大工場があまり多くありません。材料は金屬、陶器、木材などで、その種類は前に述べた通

り器械の模造品、飛行器、機關機器などの模型であります。

木材の澤山あるバ、リヤ地方では木造品が多い、其製作は頗る簡単である、一見丸太が山の形にであつて、手に取つて見ると、其丸太が山の形にいくつにも刻まれて居るといふやうな比ひであります。凡べて智能を啓發するのを目的として少しでも子供の智識を進めやうとする努力がよく見え

て居ります。獨逸人は快活にして滑稽趣味を帶びて居るので、玩具製作に適して居るのです。

玩具には滑稽趣味がなくてはならぬから、(日本産の首ふりのお多福などなかくおもしろいものです。)玩具の製作地はその國民の性情が爽快でもしろいのでなければなりません。陰鬱な性質の人は玩具を作る資格に缺けて居るのです。日本人は樂觀的な快活な性情をもつて居るのですから、よほどおもしろい玩具を作り出して賣るべきわけです。

奥地利は木製のものが多い、紙製のものも相當にあります。正月にはおもしろいキャレンダーを多く作ります。此國に多く出来るいろいろの紙を利用して之に形式や色彩を配合して、趣向をこらしたものを作ります。日本の暦などと違つて需用が多いからウインナを中心として、廣く諸各國に輸出します。其意匠考案頗る見るべきものがあります。

佛蘭西は機會がなく見のがしましたが、英國に行つた時は、恰もクリスマスの頃であつて、市内のデパートメントストアでは多くおもちゃを陳列してありました。ロンドンには三越を五つ六つ併合した位の店舗<sup>みせ</sup>が幾つもあつて、その三階一ぱい位はおもちゃがならんで居ります。こんなに賣れ行くものかと少々驚かされました。

日本のおもちは小さいが、向ふのは大きいものです。大人だつてほしい位です。之を見て楽しむのみならず、之を用ひて身體を運動する、種々

のゲームもやるやうに出来てゐます。小は、人形、動物の模型の如き日本にもあるやうなものから、大は此のテーブルの三四倍位のものがあります。

日本で一番大きいと思はれて居る木馬などの比較ではありません。日本でもかくの如き大規模のものを製作するやうになると莫大の利を得る事が出来るであらうと思ひました。日本から英國に出して居るおもちゃは三十萬圓内外のものでまだく餘裕綽々たるものがあります。

米國では、各地方の事は知りませんが、フライデルフイヤに玩具製造の大工場があつて、機械を用ひて大砲の模型ブリキ製の活動人形なども夥しく製造して居りました、職工約千五六百人を使用して居るのださうです。

米國の玩具工業は近年始まつた事で、やうやく二十年來の發達に過ぎないが非常な大發展を遂げて居る。

以前は英、獨、日、澳から輸入するもののみで

需用をみたして居たのであつたが、それだけでは追々不足を生じて來たので、今日の如く此の工業が國內に於て盛になつたものと見える。日獨からの輸入だけでも二千萬圓以上に達してまだ足りない。であるから、米國は、將來玩具の市場として有望なるは疑なき事實であります。

米國の玩具は知能啓發と、快感を呼び起す事を基礎として作つてある。元來米國人は軽快な性質で、少しも遠慮などしない、極めて小供らしい天真爛漫な國民であるから、従つて其製作せられた玩具にも其特質が明にあらはれてゐる、或は机の上を跳つてあるいたり、或は水中には入つて愉快に泳きまわつたり、または飛びはねる兔など凡て活潑滑稽なるものが多いやうです。

最後に日本の玩具をしらべて見ると、五百萬圓位の製產高を有して、その材料は、金屬即ブリキ、陶器、紙、木材等ですが、その種類は多く歐米諸國の模造品に過ぎません。日本人の頭で考へても

のは人形の如き極僅かなものに止まつてゐるやうです。

一體日本人は、まねばかり上手のやうである、玩具ばかりでなく日常の必要品など凡て西洋のまねをして居る。これでは摸倣國民だなどと、外國から尊稱を奉られても餘義ない次第であります。學術工藝が發達しなかつた時代は仕方がないとしても、今後はどうか獨立して獨創的のものを工夫し發明する事に努力しなくてはならぬと思ひます。農商務省でも、特許の規則を設けて、特に此事を奨励して居るのでですが、どうも創造的のものは極めて稀であります。登録を申請するものがあつても、歐米のものに少しの改良を加へたものに過ぎないやうなのは遺憾な次第であります。

今我國の玩具を他の貿易品と比較して見ると、ブランシ類が二百二十一萬圓、機械類が二百五十萬圓玩具が二者の間に位してゐるのですから、なかなか侮るべきであります。本邦の玩具に對する各國の批評を聞いて見ると、第一に脆弱などいふ悪評があります。せんまいの如きも五六回の使用に堪へぬといふ事であります。おもちゃ屋にこれではいけないと注意すると、彼等は誤つた事を云つてゐる「つまりこわれるやうにしておかないと、どうも商買が成りたちませぬ」と訴へる。これは甚たしい誤謬であります。こわれなくても、ある一定の時間を過ぎると、子供は一つのおもちゃに倦きるのであるから、無理に弱いものを作る必要はありません。

今一つ日本の玩具はどうも危くていけないといふ事です。ブリキ製のものなど、さればしきりつぱなしであるので、子供のやわらかい皮膚を傷ける事があるのです。獨逸製のものは必ず親切に切口を折りまげて危険のないやうにしてあります。せんまいも五六回では切れないやうにしてあります。

なほ注意すべきは、歐米人は單に安價なものを

要求して居るのでない事です。同等のものを安價で賣るのでは比較して安いものを喜ぶのであるか、品物がわるくて安いのは決して之を喜ぶものでない事です。反つて値段相當の堅固なものを好みといふ事です。之を知らない日本の商人は争うて値段をやすくしやうとする、勢製造を粗末にして信用をおとすといふやうなへまをやつてゐるのであります。それから日本の玩具には新らしいものがないといふ評判があります。多くは外國品のまねばかりです、一つ頭を新らしい方面へむけて、日本獨特の發明をやつて見たいもので御座います

玩具は資本もあまり要らないし、大工場を也要しないから、日本の如く財政の豊かでない國には最適當なかつ最必要な工業であらうと思はれます。かつ國民が此工業に適して居る、いつもにこにことしておもしろいおもちゃが出來るうな顔をして居ます。材料も豊富です、本とか紙とかを用ふれば無盡藏にあります。どうか今少し、子供の小僧がありました。ある時電鈴がきかなくなつた

智能啓發、常識養成といふやうな事を土臺とした獨創的のものを產出して、此工業を發展させたいものと切望して居ります。

日本人は、どうも常識に乏しいやうです。今も途中、電車の中に兵隊さんが四五人乗つて居ました。光線がは入つて暑いので窓の戸を閉めやうと下からひつぱりあげても直にバタ／＼おつこちてしまつてどうしても閉まらない。私は隅の方から見て居て、これは戸が損じて居るのであらうと思うて居ると、傍に居た書生さんが直にちゃんと閉めてやりました。戸を前方へひつぱつてとめるといふ、わからないのが不思議な位の事がわからぬのです。自分の頭をはたらかせる事の出来ない兵隊さんはいくら訓練しても、器械的にはたらくだけで、自動的にはたらく事は出來ないと思ひました。

私が獨逸に居た時、給仕に傭うて居た十二三の小僧がありました。ある時電鈴がきかなくなつた

ので、之をなほしにやらうとすると、その小僧がいろいろにねぢまはしてとう／＼立派になほしてしまひました、「どうしてお前はそんな事を知つて居るか」と尋ねると「博物館でなほし方のかいてあるのを見ました」と答へた。また瓦斯管の損じたの位は女中が平氣で之をなほしてしまひます。

瓦斯をあけつけばなして、自分のまわりに火のつく事さへも辨へない宅の下女などと比べて誠にお耻かしい次第で御座ります。電車の中でも立派な教育を受けた人がお互に公徳を無視して平氣ですまして居る、それから口をあんぐりあいて往來を行する、西洋などでは口をあいて居る人は見たくてもありません。一體呼吸は鼻ですべきものであるといふ知れきつた事に気がつかないやうでは仕方がないではあります。

博物館の如きも、あちらではいろ／＼工夫して常識の發達をはかつて居ります。瑞西のある公園で私のおもしろいと思つたことがありました。大

きな金網の中にあらゆる鳥の種類がおいてあつてその前に一々鳥の繪を書いて之にその名を附したもののが掲示してあつたのです。子供が一見してあれはめじろこれはうづらと直に會得するやうにしてあるのです。

今一つ日本人の常識の足りない證據に私を挙げます。私たちは高等學校時代に岡本先生から頭痛のやめるほど動植物でいちめられたものです。それでしやうことなしに隨分研究もしたのですが、それで子供の知つて居るやうな簡単な事を知らないのです。ある夏川獵に出かけた時、高橋博士の息子さん其時いたづらざかりの子供でしたが、蜂をつかまへて飛んであるいて居た「蜂などつかんであぶないぢやあないか」と云ふと「いや、これは男の蜂だから刺さない」と云ふ。「どうして男といふ事がわかるか」と聞くと「男は頭の後の方が白い」と答へる。三年間動植物を研究した私は閉口して「そんな事、たれに聞いたの?」と問ふと

「お母さんから」との事であつた。お母さんは西洋人なので、幼い時からちやんとさういふ事を教へ込んで居られるのでした。

西洋人は小さい子供でも美術や音楽<sup>おんがく</sup>の話は一通出来るやうに教育せられて居ります。日本人も今後はどうか此足りない常識を補充する事に盡力したいもので御座います。

勿論玩具のみによつて之を補はうと云ふのは無理な注文であります、或は簡単なる模型を作つて機械の構造を示すとか、或は何等かの考案のもとに公徳を教へるとか、之をいちつて居る間に自然に必要な智識を會得するといふやうな玩具を得たいもので御座います。同時にほしいのは運動の時に用ゐる玩具であります。玩具の懸賞など募つて何十萬といふ數は集つても自然の教育知能の啓

發などに注意したもののが一つもない、昔のものに少し手を入れたとか、お得意の外國まねといふやうなものばかりで一向つまらないのです。

西洋に出来るのは隨分おもしろいのがある、一つの玩具にいろいろの役に立つものがあります。たとへば射的をやる玩具の如き各種の動物が並んで居て子供にその智識を與へる、射的する間に運動も出来る、またお互に競争してゲームにもなるといふやうに各方面から考へてあります。

どうか我國でも今少し頭脳をつかつて子供の心身の發育を土臺とした、そして陳腐な人まねでない獨創的な玩具の產出せられん事を切望に堪へない次第で御座います。(講演筆記文責在記者)

## 子供の戦争ごっこ

子供の遊びにも季節があります。其中で軍ごつことは奇妙に、陸軍の大演習のある期間に行はれます。陸軍の大演習は必ず秋季に舉行せられる。これは氣候の關係もあり、作物の關係もあり、したがつて後備兵召集にも關係しませうが、秋は身體が壯健に、元氣が盛になるといふ事も多少關係して居るのであります。

子供の遊びを見て居ると、春は花見とか汐干狩とか、または摘み草とか云ふやうに平和にやさしい事をやつて居る、夏になると暑いから、汗のだら／＼流れる活動的の事はしない、たまにやれば水遊び位のものである。秋に入つておひ／＼涼しげかたつて來ると、子供が期せずして活動的の遊びを好むやうになつて來る。軍ごつことは此自然にあふれて出る子供の活動であります。

そこで、此の軍ごつことを、保護者がどう取扱ふかといふ事が問題になつて來る。此遊戯がもし子供の爲めに有害無益であるならば、もしくは無價

値のものならば、無論させなくともよいわけであります。けれども、これは見かたによれば決して有害無益でなし、また無價値のものではないやうです。寧ろ甚だ有益なる遊戯であるやうに思はれます。軍ごつこが有益なる遊戯であるといふ事になると、どうしても之を獎勵するといふ位の所まで進めなければならぬ事になります。少くとも之をとめるといふ事は出來ないわけになつて來ます。

軍ごつこは少くとも共同的の遊びである、互に味方を作つて敵にむかはなければならない。それで味方となつた以上は共同一致して働くなければなりません。お前が腕を出せばおれは脛を出すといふ風に、とかく個人性を發揮し過ぎて衝突やすい時代にある兒童は、軍ごつこによつて、自然に自分の我がまゝを制して共同の精神を養ふ事が出来るのです。將來社會に立つて、よくはたらく事の出来る社會の人になる基礎を作る事が出来

るのです。

軍ごつこは普通の幼稚園でやる身ぶり手ぶりの個人的遊戯とは一寸趣を異にして、一見少こし亂暴すぎるやうな感があるかもしませんが、決してさういふ憂のあるものではない、我がまゝや、亂暴では共同的遊戯は出来ません。其上これによつて大に勇氣を養ふのであります、即ち尚武の氣象を養成するのであります。

極端な社會主義から云へばしらないが、まづ今日の文明の程度では、戦争は國家といふものが生存してゆく上に於て免かれがたいことであらうと思はれます。戦争をするとなるとどうしても強いものが勝つて弱いものが負けるにきまつて居ります。そこで國民が強くなくては、國家の存在が危なくつてくるのであります。

我が國の如く幾千年來立派な歴史をもつて居る軍國に於ては今更惰弱に陥るやうな事のないやうに、將來益此尙武の氣象を發展させたいものと思

ひます。

現今では、世界中が生存競争をして居るのでありますから、うか／＼して居れが弱肉強食でどんな馬鹿を見るか知れたものぢやありません。それで自衛の爲めに尙武教育は必要になつて來ます。これは國家としての問題ですが、個人としてなぜ此尙武教育が必要であるかと云へば、尙武といふ事を一口に云ふと目的に向つて勇往邁進するといふ事です、所謂堅忍不拔の精神を養ふ事なのです。それ故に此精神は如何なる人も持つて居なければならぬものでせう。

尙武の氣象があまり個人的にはたらくと、或は野蠻になりはせぬかといふやうな懸念を抱く人があるやうですが、その心配は御無用です、尚武の氣象といふのは決して野蠻なものではありません、人をはねとばして自分の利益をつかむといふやうなのは尙武氣象とは全然相反したものであります。今日我國の風俗が遊惰に流れるとか、華美に

陥るとか云ふのは此尙武の精神を忘れかけて居る結果ではないかと思はれます。畏けれど戊申詔勅の御主意もたしかに此邊にあつたと存せられます。

兵隊の訓練これは實に猛烈なもので血の税を拂ふ位の覺悟でなくては受けられるものでありません、私も暫らく此訓練を受けた事があるが、その経験から考へて見てもあの時位の覺悟をいつも持つて居たならば、人間は一生の中何事が一事業をなし能はぬものはなからうと思ひます。どうか家庭に於ても、學校に於ても此尙武の精神即ち堅忍不拔の覺悟を養成する事につとめたいものと思うて居ります。

去る八月十五日、暴風雨の爲めに東海道線は沼津から不通になりました、私も避暑地からの歸途に居りましたが、大に感心させられた事がありました。かの江原素六先生であります。七十幾歳の白髮白鬚の老體で、お伽噺で云へば白衣をまと

うた神仙とでも云ふやうなお爺さんが、沼津の停車場からたつた一人でくく歩き出された。「先生どこへおいでになります」と尋ねると、「東京へ歸るのでと云はれる、「どうしてお歸りになります?」と聞くと「なにあるくさ」と平然として居られる。見れば白いきやらこの洋服に夏帽をかぶつてステッキ一本ついて居られるだけでした。

若い者や青書生たちが、一大事出来といふ顔つきであちらでもこちらでもどうしやういやかうしやうと額をあつめて小田原評議をやつて居る中で「なにあるくさ」と飄然出てゆかれた翁を見てひどく感慨にうたれました。先生などはわかい時から日本固有の尙武教育に心身を鍛へて居れるから早くすでに困難に堪へ得るの覺悟をもつて居られる。それに比べて、とかく物質的にばかりかたむきやすい今の教育は如何のものかと思はれます。

軍ごつこは從來あまり重く見られて居ないやうですが考へて見ると、前申す通り隨分重大なる意

味をもつて居る遊びであるからよほど之を獎勵したいものと思うて居ります。

女は戦争をしないから尙武教育の必要がないといふやうな事も云へるでせうが、堅忍不拔なる精神、所謂鞏固なる意志は男も女も貴きも賤しきも如何なる人も必ずもたなければならぬものであります。古來孝子節婦の多くが下級の人にあるやうです。之れは一方艱難によつて心身を練磨した結果であらうと思はれます。ともかく意志の訓練といふ事は最大切な事であるから、幼い時から教育者或は保護者なるものがよく注意しなければならぬ事であります。どうも今の上流の婦人たちは意

志が強いとは思はれないやうです。所謂上流の奥さんたちの中に、一朝逆境に立つた場合、よく困難に堪へて平然として樂觀し得る人が幾人ありますか。幼時から意志の鍛錬を経て居ないと、事に出逢つた時立派な覺悟をもつといふ事はむづかしい事であります。

女兒も男兒も同様に必ず軍ごっこをさせなければならぬと云ふのではありませんが、常に尙武的教育即ち意志の訓練といふ事に重きをおいて、遊戯其他萬事を取扱つてやるがよいと思ひます。敢て幼児教育に従事さらるゝ保母の方々に伺ひます。(談話)

## 湖畔詩人に歌はれたる子供

文學士 福 島 政 雄

「愛らしき幼な子達よ。いまし等が母君の旅立ち

まし、よりはや一と月、明日こそは母君のかへり  
来ますべき樂しき日なれ。」

お、樂しきしらせに嬉しき思は溢る。年上なる子は静かなる善びもておとなしくたゞみたりしがやがて大聲に笑ひつゝ聲高く叫びつ。「母上やよ我か許へ來ませ。」

一聲は一聲より高く彼は叫びぬ。母君直にも我が許へ來ませとのさがなき望もてかれは叫びぬ。

「否、待てよしばし。幼な子、待てよしばし。母君はいましの聲きこえたまほじ。」われは山々のこととはるかなる町々のこと、過ぎゆくべき長き長き谷々のことを語りつ。幼な子は耳傾けて惑ひぬるが如くいたく心亂れにしかどなほわれに従ひぬ。

妹なる幼な子の胸のよろこびさまだぐるものこそなけれ。我が人の世のさまたげする時と隔たり僕と晝との神祕はたかれをいかにせむ。自然のまゝにあふるゝ喜びは子猫のよろこび鳥のよろこび夏の蟲のよろこびにもたとへつべけむ。かれはあてもなく躍りつ走りつ喜びあまりては口に出づ

る言葉草ものをのづからに多し。今は兄も妹にはせてその喜びの聲に答へ、はてはわが腕にいだかるゝ綠子いだきしめて其のなさけ強ひても得まほしき様なり。

やがて樂しき對話にうつりてわれらは庭の四阿に憩ひぬ。沈みゆく夕日は美しくかゞやきぬ。われらはわれらが爲したことをするべて物語りつ。流はやき小川のほとりそぞろありきて、美しき二羽の白鳥うかめて岸の柳の影うつす沼にゆきし」となど物語りぬ。逝きにし冬、山櫨の小枝の綠葉、巣つくりて囀る小鳥、げに「母君の去りたまひしよりこの方のことにつくして」物語りぬ。

あはれ幼な子等よ。いまし等は此の物語あどけなくくりかへして歸り來ます母君に語るか。新たに生れし鶯鳥の雛、驢馬の子、草原あゆむ羊の子これらをもいまし等は母君に示すならむ。

空をあふげば夕暮の星はあらはれて幼な子等の眠りにつくべき時となりぬ。幼な子等はしばし心

重く胸に悲しみを覚えつ。されどもしばし一嬉しげに戯れつゝ二階へとかけのぼりゆきぬ。あはれ、われにも其の嬉しき心のかよへるか、心のままの走りくらべ共にしたく思ふ心起りぬ。

五分間の後のしづけさ一さきほどまでのさやめさは消えて幼な子等は寝床の上にねむり、いそがはしき其の手はつゝ動かで輝く其の眼は閉ぢられぬ。あはれ夢はいづこにか通ふらむ。

## 一一

われは屢々ルーシー・グレイのこときゝしことありき。またわが荒れにし野邊をよざる折々、曙の光にさびしげなる其の子を見ることもありき。

ルーシーは共に遊ばむ友とてもなく廣き荒野に住みたりき。かれこそは人の門べに生ひ出でにしいとうるはしの少女なりしを、あわれ今は野べに遊べる鹿の子、緑の上の兎は見るもルーシー・グレイの美はしき面影再び見るに由なきをいかにせむ。

「今宵は嵐吹く夜ならむ。いまし町まで行きでよ。燈持ちゆきて母上の雪のかへり路するべしてよ。」「父上、そはよろこびて参らむ。まだ正午をすぎて間もあらず。寺の時計は今二時をうちしばかりにてかしこには月かけも見ゆ。」

此の答きゝて父は鎌とりあげつ。やがて小枝の束きりはなちて仕事にとりかゝりぬ。ルーシーは手に燈をとりぬ。

山かける鹿よりも身は軽く、かれが足はいく度か粉雪蹴ちらして烟の如き雪はルーシーがゆくてに散りつ。あらしはまちしよりはやく吹き起りぬ。ルーシーはかなたこなたへとさまよひぬ。山より山へよぢのぼりぬ。されど目指す方の町は何處。氣も狂ふばかりの父母は其の夜よもすがら大聲によびつゝとほくとほくたづねてゆきたれどしるべとならむ聲もきこえず姿も見えず。曉方にかれらは草地見はらす小山のいたゞきに立ちぬ。いたきより見ればかれらが門口にいと近く木の橋見

ゆ。かれらは我が家人と向ひつゝ泣きてさけびぬ。

「天國にてわれらはあはむ。」時しも母は雪の中にルーシーの足あとを見とめつ。けはしき岡の端より下へとかれらは小さき足あとを辿りて破れし山櫛の櫛根をもすぎ長き石垣の側をも通りてやがて打ひらけたる畠中を横ぎりしが足あとはなほかることなかりき。かれらは其のあてをたどりて見失ふことなくかの橋のところへと來りぬ。

雪つむ堤よりかれらはその足あとを一つ一つと辿りゆきて橋板の半まで來りしがそのさきには一つの足とてもなかりき。

あゝされとルーシーは今日までもなほ生ける子なり、さびしき荒野にて美しきルーシー・グレイにあふことあらむといふ人あり。けはしきところをも平なるところをも飛ぶが如くに經ゆきて、決して後を振りかへることなく風にうそぶく淋き歌うたへるは今なほ生けるルーシー・グレイか嵐の路たどりゆく姿なりとぞ。

### 三

呼吸する音も軽げに手足に満つる生命覺ゆる幼な子の、あはれいかでか死といふことを知り得べき。われは小さき賤が屋の少女にあひぬ。八つになれるといひしき少女のちいれたる髪はふさふさと額にかゝりて自然のまゝのかざらぬ姿やさしく着物もいと田舎びたるが双の眼はうるはしくいと美しくて其の美しさはわが心よろこばしめぬ。

「少女子よ、いましは男をみなの同胞たち幾人か持てる。」「幾人とや。皆にて七人！」かれは答へていぶかしげにわれを見つめつ。

「その同胞たちはいづこに住めるか、われに告げてよ。」かれは答へぬ。「われらは七人、二人はコンウェイに住み二人は海に出でたり。二人は寺の墓場に横はれり——わが妹とわが弟とは。われは母上と共にその近くに寺の小屋に住むなり。」

「いましは、二人はコンウェイに住み二人は海にゆき、なほ同胞は七人なりといひしよな。美しき

少女子よ、いかなれば七人とはいへる。」

小さき少女子は答へぬ「われらは兄弟姉妹七人

なり。われらがうちの二人は寺の墓場に、墓場の木の下に横はれる。」

「わが少女子よ、いましは走りまはりていましの手足には生命あり。二人は寺の墓場に横はれるならば同胞はたゞ五人のみならむ。」

小さき少女子は答ふ「かれらが墓は縁にてわが母上の戸口より十歩あまりをへだてゝ見ゆ。二つならべるその墓の側にて、われは屢々沓下をあみ、わがカーチーフの縁ぬひ、その地の上に座りて、座りてわれはかれらがために歌うたふ。夕日沈みてあかあかと美しき折にはわれはわが小さき皿もちてかしこにてわが夕餉終ふることもあり。

はじめに逝きしは小さき妹のゼーンなりき。かれは悲しみつゝ床に横はりしが、神は遂にかれが苦しみをとり去りたまひて、かれはとほく去りぬ。かくて墓場に横へられしが、その墓の草の乾ける

頃にはわが弟ジョンとわれとはかれの墓のまはりにて共に遊びぬ。

地に白く雪の降りしく頃われは走りまはることのかなひたりしに、わが弟ジョンはとほく逝くべきこととなりければ、かれも妹の側に横はれるなり。」

われは問ひぬ「もし二人は天國にあるならば同胞の數は幾人ならむ。」小さき少女子は答へて言ひぬ「おゝ、われらは七人！」

「されど彼等は逝けり、かの二人は逝けるにあらずや。二人は天國にあるものを。」説けど甲斐なし、かの少女は、なほその心をおしとほして、述べる言葉かはらず。「否々、われらは七人なるよ。」

あはれ湖畔の歌人ウォーヴォースの美しき心に生ひいでてとこしへの花とほへる幼な子の愛らしき姿よ。暖かき家に咲く花雪つもる野邊に咲く花、賤が屋の門に咲く花、花の色香こそさま

ざまなれ、いづれか美しき自然の懷にいだかるゝ  
ゆかしき人の世の花ならざる。あゝたれか此の人  
の世を荒涼の野邊とはかこちし。辿りゆく道のべ  
に若草にはひ若草のかげに、ティジーの花もほゝゑ  
むものを。老いにし人は人の世のまゝならぬをか  
こち、盛りの人は人の世のこちたきわざにその日  
を忘れて、とこしへの泉汲まむとせざる中に、ひ  
とりうら若草の花のみぞ此の世をかざる生命の花  
にてはあるべき。行く手はとほく春のかすみの立  
ちこむるまゝにまかせて今日の一日を美しく咲き  
いでゐる花よ、あらしの風のはげしくて夕暮の野  
に枯れしほむとも誰かはそのうるはしき一日の榮  
をば見すつべき。淋しき野邊に見る人もなく榮え  
朽ちぬともルーシーの名は、ルーシーの姿は、と  
はに心とどめむ人の心に生きて、はげしき嵐の雪  
の夜半、霜のあけぼの、荒野の末の道たどりつゝ、  
淋しげなる歌にげにいかなる人の深き思をかさそ  
ふらむ。

あはれ詩人よ、深きは君がこゝろかな。世の常  
の歌聲も君がこゝろの心の琴の緒にひゞきては妙  
なるしらべの泉とながれ、世の常なる小さきとも  
君が心のかぐみにうつりては美しきみくにの面影  
かよふ。われらは日々に幼な子と遊びわれらは日  
々に幼な子の友となれどもうつし世のけがれにそ  
みにしわれらが心はとほに澄みゆくによしもな  
く、昨日の一日、今日の一日、むなしく乾ける思に  
送りて美しの花の一ひらうるほさむなさけの露だ  
なく、げにかへりみればわれらは若草の野邊に  
立てる枯木の柳か。春の風やわらかにそよぎ春の  
霞美しくたちこむれども、身は人の世のあらしに  
ゆらぎ、心は人の世の霜になやむ。あはれ此のわ  
れらが心春にかへさむ由もがな。かくてとこし  
の春の心にかへりて人の世の春の旅路に幼な子の  
心みちびかまし。思ひあまりて沈みゆくわが心の  
奥ふかくいづることもなく暖かき泉のわきいづるを  
掬ふ手にあふるゝはげに遠き世の君が歌。湖畔の

君が春の歌に胸の水は融けそめてとこしへなる春

ざにはいそしまざる。

小川とながれゆく我が心あはれ此の心のよろこびをば君ならでたれにかさゝげむ。

否、君ならでさゝぐる人もあるものを、おろかなるわれはまた幼な子を忘れてあらぬかたにさまよひにけるかな。さなりわが心のよろこびもわが心の泉もつくしても幼な子の美しき心にさゝげむ。詩人よ、われは感謝の泉を君にうけてとこしへに幼な子の花うるほさむ。

## 五、

たれか幼な時を春にはたとへし。此の人の世に人となりて人の世の春の野邊などらぬ人はなかりけむを、げに春露のたちこめて來し方の道いつしか霞に消えゆくにも似て、奇しきは幼な時の心忘れかく人となりし人の心かな。さはれ過ぎ來し方の思ひ出はわれにも人にも樂しからむものをいかなれば人はその樂しさを幼な子の美しき眼のかゝやきに思ひいでて樂しき道の美しき道しるべのわ

あはれ尊きは湖畔の詩人の心かな。美しき自然を慕ひあこがれし詩人の心は幼な時の思ひ出にもまた美しき自然にかへりて自然の中にうるはしく咲きいづる人の世の花をうたひぬ。幼な子の心に入り幼な時のわれにかへりて詩人の思はとほくうつし世のかなたに去りぬ。緑の草原も林の木にも水の流れもうつし世ならぬ天上の光にかゝやきし幼な時の思ひ出はげにいかばかり詩人の心の深き琴の緒にふれにけむ。あゝかゝる思ひ出、深き心の詩人ならでは得がたき思ひ出ながら人の世の春の思ひ出はげにかくこそあるべけれ。かゝる思ひ出に助けられてとこしへに幼な子の心みちびかむ我等が身の幸おほさよ。あはれ自然の大空に虹は來り虹は去りかゝやく星も照る月も過ぎゆく時を刻みつゝ水は流れ水は去り人は来り人は逝けど春はとこしへに幼な子の心にやどりて天上の光はとはに幼な子の眼にかゝやかむ。仰けば尊し自然の

姿、のぞめばふかし自然の心その姿とその心とを  
そのまゝに咲きいでにし人の世の花こそ幼な子の  
心ならむを、導きゆかむわれらが心のいつまでか  
萎みしまゝに止みぬべき。

## 六、

思ひかへせば湖畔の詩人逝きにしよりこゝに六十  
餘年、物かはり星うつりゆきて今はしも文明の  
光世にあまねく、幼な子の心の園はありとしある  
國々の片山里にまで満ちみちて、愛らしき幼な子  
の手にとらるゝは自然の鍵、開かるゝは自然の扉、  
フレーベルの志あまねく世に及びて幼な子の心の  
花の苔の日に日にほころびゆく様こそげによろこ  
ばしくも美しきことのきはみなれ。

さはれ人に月日のさだめあり。心の園に心の花  
照らす人の心の幼な子に通はでむなしくすぐる日  
日のみ多からばいかでか心の園にうるはしさ榮あ  
るべが。

さなり湖畔の詩人も歌へるが如く、人の心は月

と共に年と共にかはりゆきて、美はしかり思の  
いつしかにすさびゆけば、野邊のを鹿のごと躍る  
心の躍るがまゝに高しと仰ぎし山の姿、深しとの  
ぞみし川のながれも、いたづらに美はしかりし昔  
の夢となりはてゝ、今はたゞあへぐ思に心かはき、  
空しく荒野より荒野へと廻りゆかむを、かくては  
いかでか幼な子の清き心を導き得む。

されど自然を仰ぐ詩人の心にはするべる思の燃  
ゆることなく、むかしうれしき思さそひし瀧のひ  
びき、そばだつ巖、深く暗き森の色のむかしのまゝ  
の躍る心をさそふことこそなけれ、過ぎにし年月  
は自然に深き思よせてこゝに悲しき人の世の静か  
なる琴のしらべきかむ心を養ひぬ。沈みゆく夕日  
の光にもまどかなる大海の水にも動ける氣にも青  
空にも人の心にもみちみちし靈を感じて詩人はこ  
こに感謝の言の葉をさゝげかへりて人の世の春の  
心にとこしへの春の泉を汲みぬ。

あはれかくてこそ幼な子を歌へる詩人の歌に生

命あれ。かくてこそ自然の懷にいだかるゝ幼な子の心に光あれ。はたかくてこそ湖畔詩人の歌に人の世の春の旅路のしるべの力をも得らるゝなれ。われらはよのつねの幼な子の心をたゞあとけなしと愛でいつくしめど、よのつねのことによのつね

ならぬ深き心の泉汲まむことこそわれらが尊きつとめなれ。あゝ湖畔の詩人の心は今もなほ心の園の園守の心にかよひていともたふときとはの歎をわれらが心にもなほおごそかに宣るやいかに。

## 『ポール・ドンビー』(ヂッケンス) (四)

――英文學に現はれたる子供(二十三)――

岡 田 み つ

併しポールが始め幾分持つて居た元氣は銷磨して來てしまつて、奇妙な、老人めいた、考へ込む氣質の方だけが増々發達して來た。唯、彼はそれを人に示さなくなつたのが今迄と違ふので、日に、彼の物思ひ、遠慮、沈黙は募つて校内の誰人に対しても親しむといふ事がなかつた。唯一人居るのが好きで、勉強をして居ない時は、家中をぶらつき歩いて見たり、階段にいつて腰を掛け、

廊下の大時計の音に耳を傾げたりするのが、何よりの娛樂であつた。家中の様具の模様をよく知つて居て、人の思ひもよらぬ形に其を解釋したり、寝間の壁紙の紋様が小さい虎や獅子の型になつて居ると云つたり、床敷物の正方形や菱形に恐ろしい顔がひそんで見えるなどと云つた。此伴侣のない子供は、妄想の描き出す唐草模様の中に捕はれて、人と掛け離れた生活をしてゐて、誰一人彼を

會得してやるもののが無かつた。プリンバー夫人は、變な子だと思ひ召使共は、ボールが鬱いで居るのだと語り合ふ位であつた。最年長の生徒のツーツは、放心家ながら、ボールの事だけは氣になると

見え、一日に何回でも、

「如何ですか。」と健康を尋ねる。するとボールは、「有り難う。丈夫です。」と必ず答へる。すると亦

ツーツは、

「では握手しませう」といふので、ボールは無論言はれる通りにするのであつた。

ある夕方、ツーツは机に對つて、手紙を忙しさうに書いて居たが、急に妙案が浮んだかして、ペンを置いて、ボールを探しに出て行つた。さんざん探した末、ボールが寢間の窓から、外を眺めて居るのを見付けた。その室に入るが否や、ツーツは、忘れては大變だといふ風に、

「あのね、……君は何を考へて居るの」といきなり言つた。

「隨分いろいろな事を考へるんです。」とボールは答へた。

「そうかな……」と案外の事だとでも言ふらしく、ツーツは言つた。

「もし死ぬとしたら」とボールはツーツの顔を見るので、ツーツはきよろとして、不安の様子をした。

「月のよい晩に死んだ方がよう御座んすね。昨夜のやうに、空が晴れて、風が吹いてゐる、あいふ時が…」

ツーツは、困惑してボールの顔を見、「どうだかな……」と首を振りながら答へた。

「吹くといふ程吹くのでなく、波が濱の砂にあたる時のやうな音を立てる位……昨夜奇麗でしたよ。僕は長い事、水の音をきいて居て、これから起きて外を見たらば、小舟が一つ向ふの方に、月の光を一面浴びて浮いて居ました。帆のある船でね……」

ボールが相手を熟<sup>じ</sup>と見て、眞面目に話してゐるの  
で、ツーツも、何か挨拶をしなくてはならぬと考  
へた。

「密商船<sup>さ</sup>」といつて見たが、物には二方面あ  
るかと思つて「ひよつとしたら密商取締船かも  
知れない」といつた。

「帆のある船がね」とボールは繰り返して、「月  
の光を一面に浴びて。帆が銀のやうでした。而  
してそれがすと遠くいつてね、波に揺れながら  
如何したと思ひます？」

「縦搖<sup>ビラヂ</sup>をしたらう。」とツーツが言つた。

「手招きするやうでしたよ。僕に來いつてね……  
：あゝ來た！來た！」

ツーツは、今のは續<sup>つづ</sup>きに、ボールが急に大聲を  
出したので、非道<sup>ひど</sup>く愕然<sup>びつくり</sup>して、

「何が」と言つた。

「姉さんが……あれ、此方<sup>こうか</sup>を見て、手を振つて  
ゐる。僕が見えるのですよ。僕が見えるのです

よ。……今晚は、姉さん、御休みなさい……。」

ボールが、窓に立つて手を振つて、姉に挨拶す  
る瞬時のその無限の喜悅と、姉の姿が見えなくな  
ると同時に、その顔から光りが消え失せて、素の  
陰鬱な面持に歸る、その變化があまりに著しいの  
で、流石<sup>さすが</sup>のツーツも氣が付く程であつた。

ボールは、日長の頭になつてからは、毎夕、窓  
に立つて姉を待つのが例になつて居る。フロレン  
スは時を定めて、學校の前を往きつ戻りつして、  
ボールの姿を一目でも認めるまで止めなかつた。

二人が互に顔を見合せるのが、ボールの日々の生  
活の中の、一閃の日光であつた。時には、もつと  
暗くなつてから、學校の前を唯獨り歩く男があつ  
た。それはボールの父で、ドンビー君は今では土  
曜日にも、ボールに逢ひに來なくなつた。逢ふ氣  
分になれないのに、自分の愛兒の勉強をしてゐる  
窓を見上げて、人知れず、眺めたり、希つたり、  
企圖<sup>もくろん</sup>たり、樂んだりするのであつた。哀れ、此父は、

あの瘦せた子供が、夕暮に波や雲をぢつと眺め、飛び過ぐる鳥を見て、自分も翼があれば劣らず舞ひ上らうにと、捕はれの窓に、胸を押當てゝ居るとも知らぬのであつた。嗚呼！

そのうちに、夏休みが近くなつて來た。しかし、瞼の重い、此學校の生徒は、狂喜して休を迎へる風は無かつた。そんな事は威嚴ある學校として不似合だといふわけで、盛な別れの會もなく、皆ダラ／＼と出てゆくのであつた。而して各自の行先が、大概は學校よりも一層厭な家なので、よく／＼の元氣者が、長休暇の到來を、まあ止むを得ぬ事と、大人しくあきらめるので、多くの生徒はたゞ／＼厭がりきつて居た。

ボーグは、まさかさうではなかつた。夏休暇の後は、姉と離れる事になつてゐるのだが、未だ始まりもせぬ休暇の、その終りの事を、今から考へる人も無いから、ボーグもそんな事はとんと考へないで、嬉しい時が來ると待ち切つてゐた。その

故で寝間の壁紙についてゐる例の虎も獅子も、馴れて戯けて居るやうに見え、床敷物の四角や菱形の中から覗いてゐる恐い顔も、色を和げて、意地悪さうでない眼付をして自分を見ると思つた。廊下の大時計も「坊ちやんどうです」といふ音に、幾分情を籠めて居るかと思はれ、夜中音を絶さない海の響も、悲しい調子ではあるが、ボーグが釣り込まれて、眠氣を催す程に心地よく耳に聞こえた。

休暇にもう二週間しか間がないといふ時に、或日、プリンバー嬢がボーグを部屋に呼んで、ブーツンビーさん、あなたの宅へあなたの分析をするんですよ。」と言つた。

ボーグ「有りがたう御座います。」とボーグは答へた。  
ブーツンビーさん、「私の言ふ事が分るのですか。え。」と、嬢は眼鏡の目でぢつとボーグを見ながら言つた。

ガ「いゝえ。」

ブーツンビーさん、あなたは情けない生徒ですね。

言葉の意味が解らなかつたら、何故質問しないのですか。」

「ピープチングさんが物をきゝたがるものでないと教へましたから。」とボールは答へた。

「私に對つてピープチングさんの事を言ふのではないとません。決して言つてはいけませんよ。此學校の課業はあんな學校のとは大層ちがふのですから。こんだ今のやうな事を言ふと、罰に、長い暗誦を課します。それを朝の食事前に、一句も違へずに、私の前で言はなくてはいけないのです。」

「悪い積りで言つたのではないので……」とボールが辯解し始めた。

「そんな積りはないなどと、どうか言はずに置いて下さい。」……ブ嬢は小言をいふ時には殊更に丁寧な言葉を使ふので……「そんな理屈めいた言葉は、私に對つて言はせません。」  
ボールは何も言はぬが安全と思つて、唯ブ嬢の

眼鏡を見詰めて居た。ブ嬢は、やがて目の前の書付けの事を言ひ出した。

「ボール・ドンビーの性格分析、……分析といふのは、綜合の反対で、私の記憶する處では「有形、無形の事物を根本の成分に分ち解く」といふ定義をラーカー氏が下してゐます。よう御座んすか。綜合の反対なのですよ。さあ分析といふ事はどういふ事が解つたでせう。」

ボールは一向解りもしなかつたが、一寸首を下げて會釋をした。ブ嬢は書付けに目を注いで、

「ボールドンビーの性格分析……天賦の能力……」

……優秀。學間に對する性向：同前。……八の數を以て最高の標準を示すとすれば、ドンビトの以上二質は、各六・四分三に相當す。」と此處まで讀んで、ブ嬢はボールが何と思つて居るかと、その顔を見た。處が、ボール六・四分の三といふのは、六圓四分の三といふ事だか、六尺四分の三といふのだか、其とも未だ自分の學ばぬ六何

とやらいふものなのだから分らないので、手を探

みながら、ブ娘を熟<sup>じゅく</sup>と見た。それが此場合に丁度適當した所作だつたので、ブ娘は更に續けた。

「違犯<sup>たがい</sup>：二。我儘<sup>わがま</sup>：二。下品の人物を喜ぶ傾向（グラブといへる人物に對する場合の如き）始め七なりしが次第に減少せり。紳士的態度<sup>たぐい</sup>：四、（ます／＼進歩の望あり）…それからね、殊にあなたに注意してもらひたいのは、此分析の終りにある、觀察といふ處なのですよ。」

ボールはよく聞かうと身構へをした。ブ娘は聲高く一語を讀んでは、少さいドンビーに目を注いで、

つて、書付を下へ置いた。

ボ「え大抵解りました。」

「この分析は御父様の處へ行くのですよ。あなたの行爲や性質が、異様だといふのを御聞きになつたら、御父様は心配なさるでせう。此校でも皆心配してゐるので、私共もどうも心の底からあなたが好きだといふ譯に行かないのです。」

ブ娘は、此の子の最痛所に觸れたのであつた。ボールは、實家<sup>じじや</sup>へ歸る日が近くに連れ、校内の人があつたので、何故か自分にも理屈は分らぬながら、こゝのあらゆる人、あらゆる物に對して、惜しい愛しいといふ情が次第々々に湧いて來たのである。ボールは、自分が去つた後に、人が自分に冷淡であらうかと、其が堪へがたい苦痛になつて來た。皆が自分を懷かしいものと思つて呉れるやうにと、今では大きな龐毛<sup>ぼうもう</sup>の犬の機嫌でも取るやうになつて居る。この犬は學校の裏につながれており。……ねドンビーさん解りましたか。」とい

れて、これ迄はボールは怖いものとばかり思つて居たのだが、これは大でも、後で、自分を慕つてくれるやうにと願つたのである。

それで、今ボールはブ娘に向つて、表向きの分析は兎に角、どうか自分を可愛いがつてくれと一生懸命に頼むだ。(こんな所作が普通の子と違ふのだとは夢にも思はないで)。丁度其處へブ夫人が來合せたので、ボールは亦この人にも同様に懇願した。ブ夫人は、ボールを前に置いて、例の口癖の「變な子だ」を繰り返した。ボールは、仰は御尤であるが自分の病氣の故<sup>せいか</sup>でもあらうから、とにかく變なといふ事を見逃して欲しい。自分はこの校の人を皆好いてゐるからといつて、

「でも勿論、姉さん程に好きではないのですよ。あんなやうにしろといつてもとても出来ません。誰だつてあれ程に好けと言ひはしませんね。」と眞直<sup>まっすぐ</sup>と、内氣<sup>うちき</sup>とを打交せて、ものをいふ點はボールの奇異な且可愛いらしい性質の一つ

であつた。ブ夫人は、「ほんとに古風な老人じみた子だよ。」と小聲でいつた。ボールは語を繼いて、

「僕はこゝの人を皆好きです。僕が此校を出る時に、皆がいゝ鹽梅だといつて喜んだり、又平氣でゐたりされるとほんとに厭です。」といつた。

ブ夫人は、ボールが世界中無類の變な子だといふ事をいよいよ堅く信じて、博士にもその由を話すと、博士も反対はしなかつたが、ボールの入學當時にいつたやうにやつぱり「勉強させると直る」といつて、此際もブ娘に向つて、どん／＼勉強させろ／＼」といつた。

ブ娘は、もとより及ぶかぎりボールを責め立てくしてゐるのであるから、ボールは隨分重い負擔に苦んだ。しかし、ボールは課業を果す以外に、今ではも一つ他に目的があつて、其れを終始實行してゐた。即ちボールは自分が、優しい、物静な、

役に立つ少年になつて、人に可愛いがられ大事が  
られないといふのであつた。それでまへのやうに  
階段に坐を占めてゐたり窓から波や雲を眺めてゐ  
る事は今でも時折あるが、此節は同輩の中に交つ  
て、人知れず何か手助けをしてゐる方が多くなつ  
た。それで堅くるしい傍目もふらぬこゝの生徒の  
間にも、ボールは、面白い人物可愛い、遊び相手  
といふ事になつて、誰れ一人ボールに手荒くしや  
うとするものがなかつた。さうかといつて、ボー  
ルは性格をかへる事も出来ず、分析を書き換へる  
事も出来ず、やはり奇妙な子で通つてゐた。一方  
には奇妙な子であつたが爲に、他人の望んで得ら  
れぬ特權も亦彼のものであつた。例へば、夜、寢  
室へ退く時に、生徒は皆博士及びその家族一同  
に目禮するだけなのに、ボールは細い手を出して、  
大膽に博士にも、夫人にも、婆娘にも握手した。  
又、誰か罰を受けやうとして居る時に託にゆく  
役は、ボールと定まつてゐた。小使でさへ、皿小

鉢を破した時に、如何しやうとボールに相談をし  
た事があつた。而して、食事掛の喧じやの男がボ  
ールだけは最負にして、丈夫になるやうにと、ボ  
ールの飲むビールの中へ、ボーネー酒を時々混せ  
てやるとの評判さへあつた。それから尙一層の特  
權はフヒーダーといふ先生の室へ、自由に出入を  
許されてゐる事であつた。先生の處で、シーツと  
先生とが話をしてゐる傍で、ボールは黙つて聞い  
てゐると、先生は時折ロンドンの秘密な暗黒方面  
を語り出して、此休みには、其秘密の中に立ち交  
つて、自身で研究していく積りであるなどといふ  
ので、ボールは、先生を大冒險家、大旅行家のや  
うに心得て、こんな素晴らしい人の傍にと憚り多  
く思つた。

ある晩夏休のごく少し前に、フヒーダー先生の  
室へ入つたところが、先生は忙しさうに印刷した  
手紙の空白のところへ、字を書き入れてゐる傍か  
ら、ツーッがそれを疊んで、封筒に入れて居た。

「フヒーダー先生は、

「オヤ、ドンビーカイ。……それ之が君のだ。」といつて、その手紙の一つを投げてくれた。

「私のですつて！」

「あ、招待状さ。」

ボールは明けて見ると、ブ博士夫妻の名で、七月十七日水曜に、舞踏會を催すに就いて、午後七時に御來臨を乞ふといふ意味が印刷してあつた。

フヒーダー先生は、フローレンスも招待されてゐるといつて、こんどの催は丁度休暇の始まる日にあるのであるからボールは會の了りに、すぐ姉さんと一所に歸宅してもよいと言ひ添へた。

「あ、よい鹽梅だ。どんな氣分だね。」とブ博士は力を添へるやうに言つた。

「何とも御座いません。」とボールは答へた。が、床がどうかしたのか、自分はしやんと立つて居られない。壁もどうかしたのかぐらぐら廻轉るやうで、一ヶ所を熟と見詰めて居なくてはならなかつた。ツーツの頭がいやに大きく見えたり、いやに遠くに見えたりした。ツーツがボールを抱いて、

二階へ連れていつて呉れる途中も、ボールは室の戸が思ひがけぬ處にあるので、ツーツは、煙突の中一生上がりさうもないやうな心持になつた。

ボールは聲になつた覺はないと思ふが、暫時氣

でも遠くなつたのか、ふと、フヒーダー先生が耳元で自分の名を呼んでゐて、静に自分を搖ぶつてゐるのに氣が付いた。驚いて顔をあげて、四方を見廻はすと、プリンバー博士も室に入つて来て居

られる。いつの間に、かういふ事が行はれたか、自分が知らないのが變でたまらなかつた。

「あ、よい鹽梅だ。どんな氣分だね。」と

を上がつて行くのではないかと思はれた。ツーツ

が、大事さうに自分を抱いていつて呉れるから親

切だと思つて、禮をいつた。すると、ツーツはこんな事は何でもない、もつと～いろいろの事をして上げるといつて、成程、ポールの衣物を脱がせ、臥床へ横にしてくれて、其から傍へ坐つてにこ～してゐた。と思ふと、いつの間にかツーツ

がビープチンさんに變はつてしまつた。併し、どうした譯と尋ねる程の好奇心もなく、ビープチンさんだなど氣が付いた時に、いきなり、ポールは、

「ビープチンさん、姉さんに言つてはいけませんよ。」と叫んだ。

「姉さんに、何を言つてはいけないの。」といひ

ながらビープチンさんは臥床の近くへ椅子を引きよせた。

「僕の事を。」

「いゝえ。言ひませんよ。」

「僕が大きくなつたら、どうする積りだか御存

じ？」と、ポールは顔を横向にして問うた。

ビープチンさんは、思ひ付かないと答へた。

「あゅツたけの御金を皆一所に銀行に預けて、あと一文も儲けないで、姉さんと田舎へいつて、美しい庭や里や森や何かで一生姉さんと暮らすの。」

「まあ。」とビープチンさんは叫んだ。

「え。さうする積りなの、もし僕が……」といつて言ひ淀んで、暫時黙つて居た。ビープチンさんは唯ポールの顔を見守つてゐた。

「もし僕が大きくなれたら…ね…。」（續く）

# 文展の子供の繪と彫刻

倉橋生

新聞で承知して、一つの目あてにして來た『ゆふべ』(菊池契月)はやつと第七室にありました。それまでに、一つ位はと思つて氣を氣つけて居ましたが、子供が主題になつて居るのは、第六室までは一つもありませんでした。『琉球所見』(岡田雪窓)に琉球の子供、『憩ひ』(山村大雲)に支那の子供が居ることは居ますけれども、一方は那覇の町を寫し、一方は憩ひの氣分を描くために使はれて居るだけで、別段子供を描かふとされたものではありませんから問題の外に置きます。

評判の『ゆふべ』は、子供を描くとしては、極く面白いのがまへどこがされて居ます。小盥で行水といふことが、既に可愛らしい感じを誘ふではありませんか、裏の井戸の傍の柳の下で盥の中へすはつてお湯をつかつて貰つて居る女の子の體は、

年齢相應の發達をよく描いてあります。殊に小さい乳の邊から軟い肩から頸へかけての邊などは、非常によく出來て居ると思ひました。たゞ此の作に對する私の物足りなさは、全體が餘り靜的に過ぎて居る處です。そこが此の繪を上品にして居る點であるとは思ひますけれども、觀て居てどうも物足りません、去年の此の畫伯の『鐵漿蜻蛉』にも、此の靜かな調子で神秘的な子供が描かれて居ましたが、今年の此畫では、もう少しは動いて貰ひ度いと思ひます。盥の中の湯が動いて居ません、從つて手拭もぬれて居ません。洗つてやつて居る人、洗はれて居る子、共に餘り靜か過ぎはしませんか。盥の傍のぬか袋を入れた小籠や、ぬき棄てた子供の草履の様のものまでも、ちつとも動いて居ないのはどうしたのでせうか。誰れたかは此の女の子

の體を營養不良だなどと茶かして居ましたが、それは必ずしも左様でありますまい。たゞ餘り靜的なので、折角の子供の繪でありますながら、餘り積極性がなさ過ぎて居るのでせう。惜しいこと、少くも私には物足りないことです。

次の室の『紅繪』(福永公美)に一種變つた畫風で紅繪買ふ姉と妹とが描かれ、其の次の室の『青柿の櫛』に寝籠に入れられた赤坊と幼い姉とがありますが、もう一つの目あてとして來た『幼どち』(栗原玉葉)へ飛びましよう。

玉葉女史の去年の出品の『さすらひ』は、畫題にふさはしいさびしい心持が、あの畫の全體によくあらはれて居まして、私は見て居るのも胸が苦しくなりましたと其の時にも申しましたが、さびしさは此の人の作に通じての特色だと教へて呉れたりもありました。私は其の説をどこ迄信じてよいのか知りませんけれども、今此の作に對して、成程その言の通りか知らんと思つたのでした。此

の畫の中心の子供は泣いて居ます。笑つて居る畫では素よりありません。しかし、其の泣いて居るのも人形の手が折れたからではありませんか。子供當人には悲しいことでも、見るものには悲しいよりも淋しいよりも、寧ろ可愛らしい一方の感じが起る譯なのです。子供の生活を描いて缺くべからざる此の快活の氣分が、何故斯くちつとも出されて居ないのでせうか。之亦私には至極く物足りないと申さうるを得ません。殊に傍に立つて居る二人の少女の心持が一寸不分明に過ぎます。此の泣いてる子とは全く無關係に、畫面の都合上借りて來たものゝ様な氣さへします。之れが亦どうも物足りません。但し、子供の形はよく描かれて居ます。殊に泣いてる子が最よく描かれて居ます。

今年の日本畫の部で子供が主となつて居るものは、先以て此の二つです。しかも兩方とも、もう一つ陽氣には出來なかつたのでしょうか。それにしても去年の祭のよそほひを出品して、子供好き

の足をひきとめた島成園女史の明るい作が無いのは、どうしたのでしよう。

観てゆき順では日本画の次が彫刻になつて居ます。そうして、私の足は『同盟罷工』(渡邊長男)の前へ立ちました。何たる光景でしよう。勿論彫刻に對する私の鑑識力は繪畫に對するよりも一層しとい素人です。技巧上のことは私には少しも分りません。たゞ自分でも思ひきつて批評的態度を棄てゝかゝつて居ます爲か、彫刻のあるものに對する、ほんとうに私の心がひきつけられて仕舞ひます。どこ迄も／＼其の味の深さに自分を忘れて仕舞ひます。『同盟罷工』の前に立つた私は、正直のところそれ程ではありませんが、なか／＼目を放すことが出来なかつたのです。腕を組んで立つて居る父の顔には、暴慢な雇主に對する弱者の最後の手段として同盟罷工には加はつたものゝ、さて斯く妻子に泣きつかれ、泣きすがられて見れば明朝の米をどうしよう、之れから後の行さきを何

としよう。なあにどうかなら、おれも男だとはいひやうに出て居ます。其の骨節荒い両の腕にも出て居ます。但し此の彫刻の技巧によつて出て居るのか、此の題目から呼び起された私の感じか、その區別は私にはよく分りませんが、何しろ、斯ういふ場合の強く弱く、弱く強い男性の心持は此の彫刻の前に佇立して渺々と味ふことが出来ます。母に抱かれて居る子供は勿論、父の足に絶る子供も父母の心が何のことか知つては居ません。其の知らないのが親達には一層苦しいのでしよう。此の彫刻は素より子供が主題になつてゐるではあります。しかし、此の二人の子供が、觀るものゝ感じの上には寧ろ一番大きい力を持つて居るのかとも知れません。此の室の仕舞の方に『のぞき』(建島大夢)があります。鑄銅で可愛らしい少女が出來て居ます。

西洋画の部には、拾へば子供が澤山居ます。し

かしいけれども、それ／＼の畫趣の中に子供が點せられて居るといふのが多いので、子供といふものに興味を持つて描かれたのは『母の着物』（石川寅治）と『添乳』（赤松麟作）とでしよう。

『母の着物』は題そのものも餘り面白いものじやありません。子供が母親の着物を着た、寸法のあはない可笑し味です。西洋のポンチ繪などによくある、お父さんの外套をひきづり、帽子をぶくつとかぶつて居る滑稽と同じ趣向に屬するもので

す。無邪氣といへば無邪氣ですが、わざとふざけて居るだけに、それだけ面白味が減じる様の氣がします。それに、此の女の子の顔が私には如何にも氣に入りません。眼瞼も頬も口も、なんだか頗る妙です。此の畫伯の描かる、女の顔などは、いささか思はれます。雑誌の口繪や、小さいカットなどの外に、子供を子供として描くことを専門のことなのでしょう。顔といへば『添乳』の男の子の顔も隨分可愛らしくない顔です。『添乳』としては第一、子供の年齢が大き過ぎます。苟も二十世紀

の育児思想の進んだ今日、こんな大きな子に添乳する母親がありませうか。などと例の理屈は暫く抜きにしても、折角の可愛らしい添乳の氣分が少しも出て居ないではありますか。前の畫も此の畫も繪としては骨も折れ、又立派に出来て居るのではありますが、子供としては揃つて餘り可愛らしくないのです。

\* \* \* \* \*

去年と較べて、數に於ても質に於ても、子供の繪としては盛でない方です。去年の時も申した様に私の希望は少し偏つて居るかも知れませんが、繪と彫刻と併せて三百二十餘の出品の中に、もう少し立派な、眞な、美しい、『子供』があつてもよさそうに思はれます。雑誌の口繪や、小さいカットなどの外に、子供を子供として描くことを専門とし得意とする美術家が、そろ／＼一人位は出でよさそうなものですが。



## 名家語錄

# ●フレーベル會總會

余は童子に對して之を敬するの意は成人に對するよりも深し。

余は街頭に童子を見る毎に褴褛の衣を着すと雖も吾れ之を敬禮すべきの義務あると感ぜずんばあらず、何となれば其の衣底に何等の將來を抱藏するや測る可からざればなり(ガーフィールド)

○

世人は兎角小兒の性質を以て知り易しと爲せども、是れ實に最も奧妙なる秘密なり。見よ、世の父母たるもののが自から膝下に養育せる己れが兒子の資質(其の特性の常に現はるゝに拘らず)を如何に常に誤認するかな。饒舌快口なる豎子は其の元氣盛にして輕剽激々たるの故を以て非凡の才童と思はるゝ傍ら、其の靜默して沈み勝ちなるの故を以て誤つて天才をば不才と做すこと每々あるにあらずや(ピーゴンス・フォード)

本會總會は去月十八日午后一時より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て催されました。君が代合唱の後中川會長の開會の辭を以て會を開かれ會務會計報告について農商務省書記官鶴見左吉雄氏の我國及歐米に於ける玩具製造に就ての講演及び東京音樂學校長湯原元一氏の幼稚園雑感と題する講演がありました。尙ほ又丁度上京中の本會客員奈良女子高等師範學校長野尻精一氏のフレーベル會に就ての有益なる演説を得ましたのは、特別に幸としなければなりません。それより議事に入り、全國幼稚園關係者大會に就きフレーベル會が主催者となり又盡力すべきことにつき出席會員一同の贊同を得、滿場一致之れを可決せられました。終て陳列品の參觀及茶菓の間に各自隨意の懇談を交へ散會しましたのは五時でありました。來會者場に満ち頗る盛會でありました。

# フレベール自傳

(第十一回)

((マイニンゲン大公に宛てたる書翰))

倉橋惣三譯

## 七十九、子供の贈物

人は多種多様な形貌を備へた自然を認識するに止らず是非とも自然の内的努力の渾一、その効果的な威力の渾一を知解せしめられます。それ故人はその發達及び教養の方針に於て自然の方法に従ひます。而して遊戯に於て人は自然の創造の仕事を模倣します。

結晶の定形の如き自然の最初の成形物はそれらとは關係のない或る秘密の力によつて造り出さるやうに思はれます、而して子供は一つを知つて他を推すことが出来るやうにその第一の遊戯に於てこれらの自然の第一の動作を喜んで模倣します

子供は建築に興味を持つではありませんか、而

して自然の最初の定形は築き上げられた形體でなく何物でありますぞ。

子供が自分で選ぶ仕事や遊戯の中に深い意味が含まれてゐるといふ啓示はこれで充分な筈であります。而して子供のこの自發的の動作が未だ高い見地から充分に考へられてゐませんし又その宇宙的、人類學的といつたやうな方面から觀察されてゐませんから誰か哲學者がそれに就て理解ある立派な本を書かれんことを日々に望んで歇まないのであります。

注意力、不斷の興味、愉悦（これらを以てこの仕事が子供によつて精を出される）から全然性質を異にした他の重要な思索が起つて來ます。

子供の遊戯は必然的に子供を前よりも廣い充實した關係、前よりも高尚な觀念の群れとの關係に導きます。

子供が家を建てる？——子供は大人の眞似をしてその中に住ひたいからそれを建てるのであります、而して大人のするやうに戸棚や何かを持つてゐてその中から物を取出して他人に與へたいのです。而して私達は常に斯ういふことに注意を拂はねばなりません。といふのは贈物を受ける子供はそれがために萎縮したこせついた性質を持つ筈はないといふことであります。子供はその與へられた多寡によつて與へることが出來るに違ひありません、實際これは質樸な心を持つてゐる子供には必要なことであります。

心のこの要求を如何にして満足せしむべきか、如何にしてその創造に係る種々の贈物を與ふべきかといふことを知つてゐる子供は幸福であります人間性を備へた完全な子供としては、男の子は

極度まで望み、味ひ、與へるべきであります。何故ならば子供は既に自分が完體——宇宙——淵大なる自然に屬して居り、自分が生きてゐることはその部分を爲すものであるといふことを朧氣ながらも感じて居るからであります。

それ故に如上の意味を理解して子供は考へられ取扱はれたいものであります。

子供がこの事を感知した時こそこの階段に於ける人間に於に立つ進歩の最も重要な意義が發見された時であります。

斯る時に於ける善意をもてる子供に取つては共有物のために役に立ち、子供と子供を愛してくれる人との連結のために役に立たないかぎりはすべてのものは何の價値をも持つてゐません。

子供の性格のこの方面は兩親や教師によつて充分に注目されなければなりません。而して兩親や教師によつて子供の性質の活動的な直覺的な方面を躊躇し養うてゆく手段として用ゐられなければ

なりません。それ故に甚麼ものでも、子供の贈物なら如何に僅かなものでも氣に止め、顧られないやうなことがあつてはいけません。

#### 八十、再びイベルドンへ

教育者としての私の最初の企圖を一口に言ひ現せば私は一生懸命になつて私の生徒に出来るかぎり善き教育、出来るだけよき訓育、教養を與へたいと望んだのであります、けれども私はその頃私が占めてゐた位置と私自身の持つてゐた教養とを以てしては私の計畫を實行し私の目的を達することは出来ませんでした。

このことが明かに分つて來ましてからすぐ私はしばらくの間ベスタロツチの許へ行つて滞在してゐるに若くはないといふ考へが起つて來ました。私は自分のこの考へを判然と言ひ現しました、而して一八〇八年の夏、私は三人の生徒を伴つてイベルドンを訪れることになりました、乃でしばらくすると私は同時に教師でもあり、研究生でも

あり、教育者でもあり、生徒でもあるといふことになつたのであります。

#### 私がイベルドンに於て期待してゐたすべてを簡単に言つてみますとそれはあらゆる創造活力に於

て生活を刺戟し表現し、人の多面なる心を満足させ、内的に外的にその力を得たる青少年の激渾たる内的生活であつたのであります。乃で私はベスタロツチはこの生活を仕事の中心であり、源泉であり、精神的師導者であるに違ひないと想像しました。ベスタロツチは彼の意見に基いてあらゆる動作に於ける子供の生活を注目し子供の發達のすべての階段に於てその生活を見てゐるに違ひない、又何はともあれ個人生活として、家族的生活として、社會生活として、國民生活として、更に一般的に人類生活としての子供の生活に同情し子供と一緒に感じてゐるに違ひないと想像しました。

這麼想像をして私はイベルドンへ着きました、イベルドンでは解釋の附かぬやうな教育上の問

題はありませんでした。

私の心が私の周囲の生活を忠實に映じたことは一八〇九年の私の報告が充分に語つて居ります。

ベスター・チの仕事の眞髓に觸れるために私は校舎内の主要建物即ちそのものゝ中へ住ひたいと思ひました。(註、ベスター・チはその教育事業を完成すべくイギリス城を市より借受け居たるなり)

私達は普通の研究生と同じくこの願ひは許さるべきでありましたが外部から嫉妬の邪魔が入つて許されませんでした。けれども私は直きに校舎から程遠くない場所に宿を求め得ました、それ故私達は生徒に混つて食事を共にしたり私達に課せられた學課に於ては生徒と一緒に勉強したりすることができました、つまり生徒連とまるつきり同じ生活をすることが出来たのであります。

私は直きに不完全なことを澤山見ました、けれどもそれにも係らずすべての方面に漲り亘つてゐ

る活動、生々とした努力、私を取巻いてゐた生活の精神的努力(それはその勢力の範圍内に来るすべての人々を惹きつけると同じやうに私をも惹きつけて了ひました)は私に私がこゝで纏がてすべての私の難問を解決することが出来るであらうといふことを納得させました。

私自身に就てのみ云ふならば私は何時も私の生徒が身心共に元氣に充ち満ちてゐるこの生活から充分出来るかぎりの利益を受けてゐるか何うかといふことを注意するに餘念がありませんでした。

これがために私達は皆と一緒に課業を受けました。私はベスター・チと共に教授科目の各科の關係の第一點から考へ出すために各學科を根本から研究することを私の特別の仕事としました。

#### 八十一、懲らざる教育法

強制的な包含的な刺戟的な生活は私をも刺戟しました、而してその包含力とその威力とを以て私を捕へました。

それが多くの不完全や欠點にまで私を盲目にすることの出來なかつたことは事實であります。是等の不完全や欠點は全組織の一般的性質及び努力によつて補はれました。何故ならばこのことは當時にあつても明々白々な二三の絶對的矛盾を含んで居りましたが尙大體に於てその内的連結と伏在せる渾一とを主張してゐたからであります。

ベヌタロツチが語る時には、その力強い定め難い激勵的な向上的な効果が人々の心をして高尚な生活に——彼はそれに達すべき道を明瞭確實にしたのではありません又それを成し遂ぐべき手段を指示しもしませんでしたが——向つて燃え立たしめました。

斯く教育的努力の力と多種なることが渾一及び包含力に於ける缺乏を補つたのであります、而して愛、温情、完體の活動、人の親切心、及びその仁慈が明瞭、深味、徹底、ひろがり、忍耐、確固不拔の缺乏を補充しました。

斯うして教育の各分科は充分興味を感じてゐるやうな状態に居りました、けれどもそれはたゞ更に小區分に分類することをのみ心掛けてゐて渾一に向つて資するところがありませんでしたから観察者を満足させる程充分には行つてゐません、手段及び目的の兩つながらに關して努力の渾一の缺乏を私は直きに感じました、私はそれを種々の事柄が教へられる所の方法の不充分、不完全、不似合の中に認めました。乃で私はすべてのものに關して出来るかぎりの洞察力を得やうと試みました、而してすべての學科——算術、禮儀作法、唱歌、讀書、圖畫、國語、地文學、自然科學等の研究生となりました。

私は今までよりも高尚な何物をか見ることが出来ました、而して私はより高い効驗に於て全教育組織の緊密な渾一を信じました。勿論ベヌタロツチ自身よりも大なる確信を懷いてゐたのではあります、私が眞實私は私がこのことを今よりも一層明瞭

に悟つたといふことを信じたのであります。

私は眞の教育方法を施してこれを發達させて行く國及び其處に住める人々を幸福であると信じました、而して私の國に於けるこの教育方法の効果を知りたいといふ望みは郷土を愛する心から自然湧き起つて來ました。このことに就ては既に述べた一八〇九年の記録の中に記してあります。

不統一の原因があるところには完體は分裂し、

時には全部矛盾せる諸部分に分離されます、而して絶對に調和的な渾一が缺けてゐるところには甚麼連結があらうともそれは内部からの必然的な結合からではなく偶然な外的な係累から引き出され合からであります、全組織は己の墳墓を掘るの止むなきに至り自殺者となる他はありません。

扱て今や私はイベルドンに駐ることが善い仕合せとなるか悪い仕合せとなるかといふやうな羽目

に陥りました。ベスタロツチ及びその友達の中には喜き人惡しき人、有利な人不利な人、強き人弱

き人、空虚な人充實せる人、氣儘な人謙讓な人などがあつて真正面に私の前に現れて來ました。

私は偶然一八一〇年のグレート・コンミツショーンの時に丁度イベルドンに居合せることになりました、ペスタロツチも彼の所謂友達と稱する連中も誰も彼も私の欲するものを私に與へることが出来ませんでした、又與へることを喜びませんでした。

彼等の定めた男の子を教育する法、一大人類家族の部分としての男の子の徹底せる教育法に於て私は人類をのみ満足させるに充分な理解を見出すことが出来ませんでした。

それは博物學、自然科學、獨逸語、一般に言語といふもの、歴史、就中宗教的教化に就ても同様でありました。

ベスタロツチの獻身的な講演も甚だ漠然としてゐました、而して經驗の示す所によればそれはたゞ既に正しき道にあるものにのみ役に立つのであ

ります。

私はすべて是等の事柄に關してペスタロツチと熱心にきつぱりと話しました、而して遂に私は一八一〇年に生徒を伴つてイベルドンを去らうと決心しました。

#### 八十二、言語と音樂

けれども私はこゝにそのつゝきを書く前に尙他の見地から私の生活と仕事とを考察してみる必要があります。

種々な學科の中で言語の授業は不揃ひな移氣な生命のない點に於て殊に缺陷が私の注意を惹きました。意に充つるやうな母國語の教授法を探し出すといふことが何よりも先に私を領しました、私は次の基底によつて進んで行きました。

唱歌及び音樂のことを話してみると、私に取つて幸ひなことには丁度この頃ネーゲリと・フ・アイフエルが「ペスタロツチの原理に基く音樂課程の取扱」を發表しました。ネーゲリの一般的の音樂に關する智識、殊に教會音樂に關する智識は私に強い印象を與へました、而して音樂と唱歌は人間教育の機關であると私に思ひ込ませました。音樂の練習殊に唱歌の練習はそれまで私の考へてゐたよりも遙かに價値を持つやうになつて來ました。

言語は私達の個々の世界の映影であり再現であります、而して主に結合した秩序ある音響を通して私達以外の世界に現れて來るものであります、それですから若し私が何物でも正しく影像するな

らば私はその實體の眞性を知つてゐる筈であります、私達の映像や再現の本體即ち外部世界は諸體を含んで居ります、それ故に各體を現すために一定の形、一定の音響の連續、即ち一定の言葉といふものが必要となつて來ます。諸體は性質を異にして居ります、それ故に私達の言語には是等の性質を現すべき形容詞が必要であります、諸體の性質は根元的か或は相對的で夫等が何であるか、何を持つてゐるか、何になるかを現します。

ネーゲリは音樂及び唱歌を教ふる事に於て、並

びに人間生活を淨化する刺戟物としての音樂唱歌

の効能を叙述することに於て甚だ堪能であります

た。而して私がネーゲリのこの課業を聞いてから約二十年も過ぎたのであります。がこの課業が燃やしてくれた音樂に對する愛の炎はまだ私の胸の中

に善に向つて盛んに燃えて居ります。而してその上、私は私の生徒を教へてくれた所のこの二人の

優秀なる音樂教師によつて、ヴァイオリン、ピアノの如き純然たる機樂も亦歸する所二三の簡単な發聲器の獨立的發見を通して發達したのであるが聲樂に基礎を置きこゝから引き出されたのであるといふことを教へられ納得せしめられました。

私は斯く開かれたる道をその時以來打ち捨てゝは置かず、に愛と注意とを以て絶えずその道を辿り好結果を得ては喜ぶことを怠りませんでした。

この音樂教授方針はその後擴大され應用されて常に識見もあり経験もある音樂教師達の賞賛を贏

ち得ました。

#### 八十三、遊戯と散步

私は又子供の遊戯、即ち戸外に於ける諸種の遊戯をも研究してみました。而して是等の遊戯が理性、心靈並びに肉體を目覺し強める偉大なる力を持つてゐることを認めました。

是等の遊戯及びこれに關係したことの中に私は學校内の生徒や若者を活氣付けた倫理的の力の主發條を見附け出しました。

私が今熱心に確言してゐる所の遊戯なるものは異常な激勵力の精神的沐浴と解すべきであります。而して遊戯に對する稍高級な象徴的意義の加つた感覺がまだ私の上に起つて來てはゐませんでしたが私は餘念なく遊んでゐる子供の一人一人に於て私が大なる價値を置く所の、身心兩つながらを支配する倫理的の力を認めることが出來ました。

倫理的激勵といふ方面から見て遊戯と甚だ似通うてゐるものは散歩、殊に普通の遠足會の散歩、

特に又ペスタロツチに導かれる時の散歩であります  
した。

是等の散歩は常に必ずしも自然に親しむ機會を得ることを意味しはしませんでした。けれども自然そのものは、たとへ求められなくとも、常に散策者を自分の近くへ惹き寄せました。

自然に親しむことは向上であり、激勵であり、淨化であります。

自然が偉大な精神界の巨人と同じく私達を牽きつけるのはこの原因からであります。

何時でも學校の休みの時とか教へることの合間小間とかには私はその頃自然の眺望、自然の親交の中に時を過しました。

るやうになつて來ました。  
日影うらゝかな廣々とした丘の上、水晶の如く透き徹り鏡の如く滑かな湖みづかの濤、小暗き森の中にそゝり立つ大木の下蔭なぞをそゝろ歩く時、私の心靈はまこと神にも似たる觀念と人の心の計り知れぬ貴さとで充たされるのでありました。而して私は人類を神の寵兒であると考へて一人微笑んで居りました。

ペスタロツチの普通の講演、殊に夕方なされる講演の外には何物も問題とするに足りませんでした。ペスタロツチはその時人類の氣高き雄々しさと眞の愛との繪畫を呼び起しそれを詳細に發露することを喜びました、而して上に述べたやうな内的生活を送ることに向つて甚だ力強い貢献をなしました。而かも尙私は空しい幻影に夢中になつてしまふやうなことはありませんでした。否、それどころか私は常に私の實務をしつかりと睡みつわめて居

斯る夕方の散歩はいつも忙しく過した日の後には私に取つては缺くことの出來ない必需性を帶び

亡くなつた兩親のことを考へる時には何時も後に残つてゐる家族の者の上を思ひ出すのが常でありました、殊にしばらくこゝに書きませんでした親愛な最長兄のことを思ひ出すのであります。

長兄は既に數人の子供の慈しみ深い父となつてゐました、私は長兄の取繕はぬ父らしい看守に於て分け前しました。而して私の心靈は私が最良なりとして喜んで選んでやることの出来るやうな教育を長兄がその子供に與へることが出来るやうにと望んで歎みませんでした。既に私がフランクフルトに居た時分から私は教育に關する私の意見や教育の方法やを長兄の許に書いて送つてゐました、新しい智識から割り出して長兄の場合に適合すべき事柄を抽出したり收集したり分類したりしました。第一の機會に於て長兄がそれを使用するやうに彼に與へたかつたからであります。

ペスタロツチの教育法の考察及び例證に大なる裨益を與へたことの一つは諸國の政府からイベル

ドンへ派遣されて居る多數の青年の集つてゐたことがあります。是等の青年のある者とは私は非常に親密な交際を結びました、而して互ひに意見を交換し合つて自分の觀察によると同じ位の利益を得ました。

兎に角私はイベルトンに於て愉快な日を送りました、生活の調子は高められ、私の後半生は批判的に決定されました。

けれどもイベルトンに於ける生活の終る頃、私は未だ曾つて感じなかつた位明かに內的渾一と相互位屬の缺乏並びに彼の地に於ける教育の外部的理解力と徹底の不充分とを感じたのであります。



明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)  
婦人と子ども 第十四卷第十一號 大正三年十一月五日發行

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場